

福祉教育への挑戦(10)

最終回 中等教育段階で福祉を学ぶ生徒は増える？

高井裕二

今回は非常勤先の高等専修学校で行った調査をもとに、中等教育段階で福祉を学ぶ、対人援助に関心を持つきっかけについて考えてみたいと思います。高井(2023)にて、非常勤で勤務をしていた高等専修学校で福祉コースを選択した生徒に「福祉コースを選んだ理由を教えてください」という自由記述式のアンケートを実施しました。4年間で92名(この数字からも、高等専修学校及び福祉コースの生徒が多いわけではないことが伺えますね)の生徒を対象としています。ここでは、結果をもとに、主観も織り交ぜながら書いてみます。

①消去法

ファッションを学ぶコース、パソコンを使った情報を学ぶコースそれぞれが苦手だったので、福祉を選んだという内容です。非常勤先の高等専修学校に進学することを前提とした場合、この時期は入学時にコースを選択しなければならなかったので、「一番、自分の中でなんとかなる」と感じたコースを選択したと言えます。

入ってからベッドメイキングや介助等、手先の不器用な生徒は入学後に苦労していましたが、中学生時代に福祉がどう映っていたのか気になりますね(アンケートのみでインタビューまで実施できていません)。

②家族のケア(介護)の経験

祖父母、妹や弟などの世話をすることを通して、「より良い介助方法を学びたい」と思ったり、家族の役に立ちたいと感じたりしたことがきっかけのようです。「ヤングケアラー」と呼ばれるように私生活に大きな支障が出る状態は問題ではありますが(「ヤング」だから問題で、それ以外の世代なら良いという価値観やケアをそもそもどう捉えるか、語るのかという課題は別途存在します)、福祉に関心を持つきっかけとしてケアの体験はあるようです。

③中学校の職業体験(中学校時代に触れた福祉教育)、保護者が福祉職

中学校時代に地域にある福祉施設に行って介護等の体験で福祉に関心を持った生徒です。授業をしていても、初めから介護職として働きたいといった明確なビジョンを持っている生徒が多かった印象です。

また、親が介護職員などの福祉職で身近に見てきたこと、福祉職の保護者から勧められたから福祉コースを選んだという生徒もいました。「きつい」「汚い」「危険」の3Kと表現されることもある介護職ですが、保護者の働く姿勢に感化されたり、保護者が自身の仕事を肯定的に捉えたりしていることも伺えます。

上記のように見ていきますと、今回のテーマである中等教育段階で福祉を学ぶ生

徒を増やすためには、③のように中学校での職業体験の選択肢に福祉業界を充実させていくことや福祉業界で働く保護者層に 10 代で福祉を学ぶことができる学校があることを周知することなどが必要かもしれませんね。とはいえ、①のような消極的な理由で入学した生徒でも入ってから福祉を学ぶ楽しさを感じてもらえたら、彼らが自然と周囲に言葉にしてくれて、「あそこで福祉を学んでいる先輩が生き生きとしているから」と関心を持つ生徒が増えてくるかもしれません。

私の内容は高等専修学校に絞った内容でしたが、10 代の若者に対して福祉、福祉職をどのように伝えていくか、福祉業界全体で考えていきたいですね。

この連載では、高等専修学校の中で介護職経験のない私が介護系科目を悪戦苦闘しながら教えていくことを「福祉教育への挑戦」と題して書いてきました。しかし、この 2023 年 4 月より所属大学が変更したことに伴い、高等専修学校での非常勤講師を断念せざるを得なくなりました。大学や福祉系職能団体でも福祉教育を行っているものの、本旨と合わない判断しまして、今回を持って最終回とさせていただきます。まとまりのない文章ばかりでしたが、お読みいただきまして、ありがとうございました。

【参考文献】

高井裕二・竹田直樹「高等専修学校及び福祉コースの選択理由に関する研究 -テキストマイニングを用いたアンケート分析を通して-」、『教育文化研究』, 第 13 号(2023)